

ギリシアとインドの邂逅：二言語併用貨幣の出現

バクトリア王国のギリシア人諸王のうちデメトリオス 1 世(在位 200-185 B.C.)はヒンドゥークシュ山脈を越えてインドの西北に進出した。これ以降の諸王の貨幣とヒンドゥークシュ山脈以北にとどまっていたころの諸王の貨幣とは異なる面がある。銘文についていえば、これまでは、ギリシア文字で記されたギリシア語であったものが、ヒンドゥークシュ山脈以南のインド西北に進出した後は、表にギリシア文字で記されたギリシア語、裏にカローシュティー文字やブラーフミー文字で記されたインドの言語というように、表裏に異なる文字と言語がしるされた貨幣、いわゆる二言語併用貨幣が現れる。

次に紹介する貨幣は比較的早い時期のもので、エウクラティデス 1 世(在位 171-155 B.C.)の銅貨である。なお、バクトリア諸王の系譜と在位年は前田 1992 による¹。



表の左・上・下にはギリシア文字・ギリシア語で、左から右に、ΒΑΣΙΛΕΩΣ (basileōs 王の)、ΜΕΓΑΛΟΥ (megalou 偉大な)、ΕΥΚΡΑΤΙΔΟΥ (eukratidou エウクラティデスの)とあり、全体で“偉大なる王エウクラティデスの”となる。裏の上・下にはカローシュティー文字・インド語(ガンダーラ語)で、右から左に、maharajasa(大王の)、evukratitasa(エウクラティデスの)とあり、全体で“大王エウクラティデスの”となる²。

■上では古代文字資料館蔵のギリシア文字とカローシュティー文字による二言語併用貨幣を紹介したが、初期の二言語併用貨幣にどのようなものがあるか、それを文献によって確認し文字種で示すと次のようになる。

デメトリオス 1 世(200-185)	┌	デメトリオス 2 世(180-165)	ギリシア文字とカローシュティー文字
		アガトクレス(180-165)	ギリシア文字とブラーフミー文字
		パンタレオン(185-175)	ギリシア文字とブラーフミー文字
.....		エウクラティデス(171-155)	ギリシア文字とカローシュティー文字

¹ 前田 1992。146 頁参照。

² 中村雅之 2004 参照。

前田 1992 によるとデメトリオス 1 世の息子には、デメトリオス 2 世、アガトクレス、パンタレオンの三人がいたという。そして、それぞれの王名の二言語併用貨幣が発行されている。デメトリオスとあるものはギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり、これは 1 世のものではなく、その息子の 2 世のものであるという³。アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある⁴。これにやや遅れて、デメトリオス 2 世に反旗を翻してバクトリアの王位についたとされるエウクラティデスは、ギリシア文字とカローシュティー文字による二言語併用貨幣を発行した。

さて、グプタ 2001(もと 1969)が“彼らはバクトリア領では 1 言語の貨幣を発行し、カローシュティー文字が使われているインド領では 2 言語の貨幣を発行したとみられている。”というように、領有地により銘文の種類を変えたとするのは十分に考えられることであり、そのような観点からすると、アガトクレスとパンタレオンがカローシュティー文字ではなくブラーフミー文字を利用したのも、両者の領有地と何らかの関係があると見てよいのかもしれない。

問題は、どちらの二言語併用貨幣が先に発行されたかということである。インド西北における二言語併用貨幣の出現は、管見による限り史上初の出来事であり、ギリシア文字とカローシュティー文字銘文の貨幣が先か、それともギリシア文字とブラーフミー文字銘文の貨幣が先かということは、貨幣銘文を扱うものにとっては気になることである。しかしながら、この三者を兄弟とする説を受け入れるとするならば、同時代人ということになるわけであるから、どちらの二言語併用貨幣が先にできたのかということ进行を明らかにするのは困難である。もっとも、バクトリアの諸王のなかでブラーフミー文字を利用したのはアガトクレスとパンタレオンだけのように残存数も少ない。それ以外の二言語併用貨幣はギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり、後代と周辺の貨幣様式に与えた影響という点では、後者のギリシア文字とカローシュティー文字銘文による二言語併用貨幣の方がはるかに大きいということ間違いない。

■二言語併用貨幣出現の背景

ギリシアの貨幣様式はインド的なるものに接し、インドの貨幣様式はギリシア的なるものに接し、そこで様々なことが起こった。ギリシア貨幣は方形という形態を獲得した。しかしながらこれはインド貨幣が備えていた形態を借用したにすぎない。また、インド貨幣は金型打刻という製法を獲得した。しかしながらこれもギリシア貨幣の製法を借用したにすぎない。ところが、二言語併用という貨幣銘文のあり方は、ギリシアにも、インドにも、周辺の諸国にもなかったもので、インド西北において初めて出現した貨幣様式である。

思うに、一度確立した貨幣の様式を変えて、新たな様式を借用するという事はそれほど容易なことではない。ましてや、これまでにない新たな様式を創り出すとなると尚更の

³ “これらのコインはいずれもデメトリオス II 世のものと考えられる。そしてこの二言語併用には特別の意味があったと思われる。それはカローシュティー語文化圏とデメトリオス II 世との深いかかわりを示すものにほかならない。デメトリオスがインダス河流域の経営に力をふるったからなのかもしれない。” (161 頁)

⁴ この点はグプタ 2001(もと 1969)の 24 頁に指摘がある。貨幣の見本は、パンタレオンについてはグプタ 2001 の 217 頁 No. 36、アガトクレスについてはジョン・ウィリアムズ 1998 の 46 頁参照。

ことであろう。しかしながら事實は、二言語併用貨幣というまったく新しい貨幣様式が出現したわけである。なぜこのようなことが可能となったのであろうか。

先に紹介したように、グプタ 2001(もと 1969)は“彼らはバクトリア領では1言語の貨幣を発行し、カローシュティー文字が使われているインド領では2言語の貨幣を発行したとみられている。”という。インド西北への進出にともない被支配者側の文字言語(カローシュティー文字・インド語、ブラーフミー文字・インド語)をも表記する必要が生じたということであろう。そしておそらく、初期においては主としてインド向けの方形の銅貨において二言語併用の銘文が採用され、その後二言語併用の銘文の使用は徐々に拡大し円形の貨幣にも採用されていったものと想像する。しかしながら“表記する必要が生じた”ということの説明は困難である。経済的な面、王宮内部の事情などさまざまな考慮が必要であろう。いまは二言語併用貨幣という芽が出て育つための幾つかの条件が、インド西北の地にあつてすでに準備されていたということについてのみ述べておきたい。

その一つ目は、二言語併用の公的な文字資料がすでにあつたということである。ガンダーラの西南方に位置するカンダハルから 1958 年、アショカ王碑文が発見された。アラム文字・アラム語とギリシア文字・ギリシア語を併記した法勅である。これはバクトリア王国の創始者であるディオドトス 1 世(在位 256-248 B.C.)の頃のものという⁵。この地方に二言語併用の碑文が行われていたことは、二言語併用貨幣の出現を容易にしたことであろう。あるいは、二言語併用貨幣の発行には、アショカ王碑文の建立を模すというような政治的意図も含まれていたのかもしれない。なお、ギリシア文字・ギリシア語と他言語との併用資料はインド西北に限らず広く見られるところである。たとえば、エジプトのアレクサンドリアからそれほど遠くないロゼッタの地で発見された所謂ロゼッタ・ストーンは、エジプト象形文字による古代エジプト語と、ギリシア文字によるギリシア語で、プトレマイオス五世を記念する布告を併記したものである。時代は紀元前 196 年、これはいま問題としている二言語併用貨幣とほぼ同時代のものということになる⁶。

二つ目は、まさに土壌ともいうべきものである。すなわち、インド西北という地では、ギリシアやインドなど様々な習慣を持った民族の接触があつた。そして、激しい接触は良くも悪くも一つの傾向を生んだであろう。この接触によって、様式の変更すなわち習慣の型の変更にたいして寛容となる傾向が生じ、二言語併用の貨幣銘文の出現と発展を容易にしたということではなかろうか⁷。

【参考文献(発行年順)】

田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』, 講談社。

前田耕作 1992. 『バクトリア王国の興亡』(レガリス文庫), 第三文明社。

⁵ 前田 1992 の「十二 両世界の王」(172-211 頁)参照。

⁶ 以上はモーリス・ポープ 1995 の 115-163 頁参照。

⁷ このような考えが許されるとしたならば、二言語併用貨幣が生まれたインド西北のガンダーラ(現在のペシャワール一帯)の地はその後革新的な大乘仏教運動の情報発信源となるわけであるが、その運動にとってプラスに働くであろう「傾向」すなわち「変化に対する寛容の傾向」というようなものが、その運動に先立って既にこの地において醸成されていたということ、この二言語併用貨幣の存在が示しているとも言える。

モーリス・ポーブ著/唐須教光訳 1995. 『古代文字の世界 エジプト象形文字から線文字 B まで』, 講談社
学術文庫。

ジョナサン・ウィリアムズ編/湯浅赳男訳 1998. 『図説 お金の歴史全書』, 東洋書林。第 1 刷 1998 年, 第 2 刷 2002 年。

P. L. グプタ著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 —古代から現代まで』, 刀水書房。

中村雅之 2004. 「カローシュティエー文字貨幣 3 種」, 『KOTONOHA』第 22 号, 1-3 頁。

(文責：吉池孝一 2010. 5. 18)